夢 19

株式会社ドリームパートナーズ
代表取締役　藤本 准一
【HP】http://www.dream-p.jp

18年ぶりに社員が東京に戻る
昔と比べ二つの変化

みなさんこんにちは。ドリームパートナーズの藤本です。3月最後の週末、今年度（24年度）の残務処理をしながらコラムを執筆中です。今年度もいろいろなことがあった1年でした。弊社の業績はおかげさまで今年度も前年度を上回り、相対的には良い1年だったと言えると思います。ただ目標という観点から見ると少し足りないという結果。土壇場に強い社員を育てたいという思いがありながら、なかなか毎年うまくいかないジレンマも少し感じています。来期以降の課題です。

さて今年度は自動車保険の大きな制度改定、この4月以降の生命保険の予定利率の見直し（実質的な値上げ）など、業界としても大きな環境変化の1年だったと思います。

私たちの営業活動にも当然影響が大きく、試行錯誤をしながらお客様と接した1年でした。弊社の取り組みとしても、通常1年ごとの更新が当たり前だった自動車保険も3年の長期契約を大半のお客様にご案内させていただきました。制度改定の中でも

24年度は試行錯誤の1年
新年度からお客様接点の強化を

少しでもお客様にメリットがあるようにとの思いからです。私たちは保険代理店である以上お客様とお会いして、接してなんぼの世界。その中で関係を深

・・・ん。

≪28≫

「ほけん」「あんしん」「50音締了の“ん”」

株式会社一期（いちご）保険事務所
代表取締役　石井 裕二
HP▶http://homepage2.nifty.com/ichigo/

18年ぶりでしょうか、保険会社の社員さんが、巡る転勤から東京へ戻ってきました。

彼は、当時新入社員として弊社を担当し、若いながらも積極的に弊社に関わり、共に数字を積み上げてきた社員さんです。

転勤を重ね、赴任先の土地ではさまざまな代理店さんと時間を共有したのでしょう。仕事に対する考え方も、教科書通りの正論と、その実務の難しさ（矛盾）をわきまえた柔軟性のある視点を身に着けていました。

当時の支社長もご足労いただき、集まった代理店仲間との同窓会さながらの席は、失敗談や暴露話も今や笑い話です。

【昔は良かった】

代理店は、担当する社員の入替わりを幾度となく経験し、その度に、お互いの考え方や思いを語り合います。

そこには、歩むべき方向を共に進んでいこうとする気持ちが何よりも優先されています。

担当社員は、代理店の立場やお客様の事情など、腹を割って相談できる身近な存在となり、時には、無理なお願いにも何とかしてくれた経験などは、弊社に限ったことではないでしょう。

こうして、昔の保険会社と代理店のつながり方を知る社員さんと話すと、「昔は良かったね」と、今とは違う何かを感じてしまいます。

何が、昔と違うのでしょう。個人的な見解ではありますが、その要因には、大きく二つの変化が影響していると考えています。

一つは、保険会社と代理店の関係が、明確なビジネスの関係へと線引きされたことでしょう。相互の立ち位置に一線を画することで、お互いの努力による成長が必要であると変化しました。

コンプライアンスの観点からも、保険会社主導の教育が急務となり、代理店の都合や、お客様の事情を考慮するあまり、規定が置き去りにされる弊害も排除しなくてはなりません。確かに、担当レベルで無理を通せた時代の方が不自然だったのかもしれません。

もう一つは、代理店の格差（ランク付け）を制度化※したことです。（※保険会社により異なります）

昔は、専業と兼業との業務形態による区分はありましたが、そこには、提供されるコンテンツの違いこそあれ、格差的な評価は存在していませんでした。

『人は格差をつけると働く』と言われています。これは、業界を問わず、労働意欲を維持するための方法として、大なり小なり社会で浸透している常です。

格差は、時には努力をするための理由にもなり、また、目標を達成するための意義を見出します。格差があるからこそ、人は努力を惜しまないのかもしれません。

努力をした者は、然るべき立場と収入を得ることができ、能力に比例した評価は、十分に建設的な効果を生み出すという部分もあるのでしょう。

ルールの厳守を徹底
一方でモチベーション低下に

【価値観の変化】

しかし、長年代理店をしていると、新旧の変化にとまどうこともしばしばあります。そこには、担当社員（保険会社）との価値観にズレも感じてしまうことも伴ってしまいます。

数字の積み上げ方も、「一緒に頑張りましょう」から、「やらないと手数料が下がりますよ」に変わり、業務に関しても「このように改善しましょう」から、「これができなければ認定しませんよ」と表現されます。

それは、決して悪気のある言葉ではなく、真剣に代理店と向き合う自然な姿勢なのですが、言葉を額面通り受けとってしまうと、上から目線の表現と感じてしまいます。

教科書（マニュアル）通りの正論と、その実務の難しさの理解が異なるのでしょう。

このような記述の仕方をすると批判的な意見にとられそうですが、実はそうではありません。

弊社の社内においても、ルール厳守を徹底させるには、同じような表現を用います。その結果、スタッフのモチベーションを低下させる原因になる場合もあります。

言葉を受けとる側の心理を汲んだ表現が好ましいのですが、モチベーションは、時に身勝手で、自らの意思で保ち続けることは難しいものであると割り切らざるを得ません。

心情的には寂しい気もしますが、ビジネスにおいては必要な手法でもあるのかもしれません。

現代人のカルテ

知っておきたい「病」の話

社会医学環境衛生研究所所長
谷 康平

258

ジャンクフード全盛とは好対照

3月下旬、娘・秀真がハワイに行くことになりました。追手門学院小学校（創立明治21年）とハワイのアノマスクールが姉妹提携していて、2年に1度の訪問団に選ばれたからです。娘だけがハワイに行くのは悔しいとばかりに、筆者も家内とストーカーのように訪問団についていきました。訪問団と行動を共にすることはできないので、食事風景等を陰から見守っていました。（親ばかと笑ってやってください）

日本人の食生活は昭和20年の敗戦以降、米国の食糧戦略によって大きく変えられて、日本人の死亡の6割以上が食事を中心とする生活習慣に起因するものになっていることは何度も繰り返して述べてきました。当の米国ではG・マクガバン上院議員（当時）が中心となって米国における生活習慣病の多発（特に肥満、糖尿病、高血圧症、脳血管疾患や虚血性心疾患など）に対して特徴的な分析がなされました。

結果は「食生活の見直し」でした。米国で「スシ」や「トフッティ」（豆乳で作られたアイスクリーム）がブームになったのがちょうど筆者が米国にいた昭和50年代後半でした。

米国は他国から見ると自分の価値観を押し付けてくる厄介者に見える部分を持っていますが、自国の国益を最大限守るという点ではぶれのない政策を実行している国家なのです。

今回ハワイに行って、一番興味深かったのはWhole Foods Marketという食品スーパーでした。ほぼ全ての商品が無農薬、低農薬で育てられた野菜や果物また、抗生剤やホルモン剤を投与されていない食肉、そして添加物が含まれていない食品で占められていました。販売に関してもすべて加工されていない状態で販売されていました。（即ち玄米、玄小麦、玄そばなど）

そのスーパーに隣接してThe Counterというハンバーガーショップがありました。ハンバーガーの肉の種類（ビーフ、タ－キー、チキンなど）、大きさ、焼き方、パンの種類、トッピングするチーズ、野菜などオーダーメイドで数十万の組み合わせが可能なのですが、最も興味をひいたのは、注文票にこう書かれていたことです。

「私たちの100％天然新鮮挽肉アンガスビーフは菜食用法により飼育しており、ホルモン剤や抗生物質は一切使用しておりません」

はちきれんばかりの体つきのイメージがつきまとうのですが、米国人が皆マクドナルドのようなジャンクフードを食べているのではありません。日本人以上に食に関心を持っている人がいるが故に前記の食品スーパーやハンバーガーショップがあるといえます。このあたり米国社会の不思議なところでもあり、ユニークなところでもあります。

ふりかえって、今、日本人は野田前政権がひそかに推進したTPP参加問題について、安倍内閣はさらに積極的に歩を進めています。参加すれば「S510食糧安全法」、正式には「米国食品安全近代化法」によって、「農家はFDA（米国食品薬品局）の許可なく、有機野菜の栽培や自家消費用野菜も作れなくなる。米政府が推薦するモンサント社の種子と除草剤をセットで購入しなければならない」

TPPに参加すると、このS510法案を盾に、あらゆる規制の撤廃を米国は日本に求め、結果、日本の生命線たる農業の未来がなきものになるという心配をするのは、農業関係者ばかりではありません。食に対する安全をいかに担保していくのか、国民の健康という最も重要な観点を忘れてはいけないのではないでしょうか。経済的な側面ばかりに目を向けていては大きな後悔をすることになるのでは。

もう一度食の安全を考える
経済的な面だけに目を向ける愚

案外、健康志向の高い米国人